

平成29年度第3回（通算第89回）

山口国際文化化学研究会へのおさそい

教員世話人 川口喜治

院生世話人 荒木麻耶 ビジネス・ILU・I7511

十亀陽太 中村光里

- 日時 平成29年6月28日（水曜日）16時25分より
- 場所 B202（北キャンパス）
- 主催 大学院国際文化科学研究科
- 発表者 国際文化研究科 准教授 菱岡憲司

題目 江戸時代後期における松坂商人の文学活動

要旨

小津久足（おづ ひさたり 1804-1858）は、三井家と同じく伊勢松坂の豪商で、干鰯（ほしか）問屋「湯浅屋」を営む小津与右衛門家の六代目である。映画監督小津安二郎は、久足の姪孫（てっそん、甥の子）にあたる。

小津久足は、江戸の戯作者曲亭馬琴と親交があり、頻繁な手紙のやりとりや、馬琴作品に対する「批評」を行ったことで知られている。また、久足の蔵書は「西荘文庫」の名で知られ、その古今の稀書コレクションは、商人の蒐集物としては当代随一と称される。

従来、小津久足は上記二点で知られていたが、その知名度は国文学や書誌に関心のある者に限られており、一般的には「無名」としてもよい。しかし、この「無名」の小津久足は、生涯で46点の紀行文をつづり、7万首の歌を詠んでおり、その作品の質と量は、「無名」とは思えぬほどの到達を示している。

なぜ、従来の文学史に名が残らない小津久足が、これほどまでの文学的活動を行うことができたのか。本発表では、小津久足の文事の詳細を紹介し、そうした営みの背景にある松坂商人の価値観を提示したうえで、なぜ久足が「無名」であったのかについても考察したい。このことは、一商人の文学活動の究明にとどまらず、19世紀日本における文学活動の実相を浮き彫りにするであろう。